〒398-0002　長野県大町市大町 8056-1
TEL. 0261-22-0211 Fax.0261-21-2133
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.omachi-sanpaku.com
市立大町山岳博物館公式 Web サイトは、
大町山岳博物館友の会の支援により博物館が運用しています。

OMACHI ALPINE MUSEUM
市立 大町山岳博物館

山と博物館

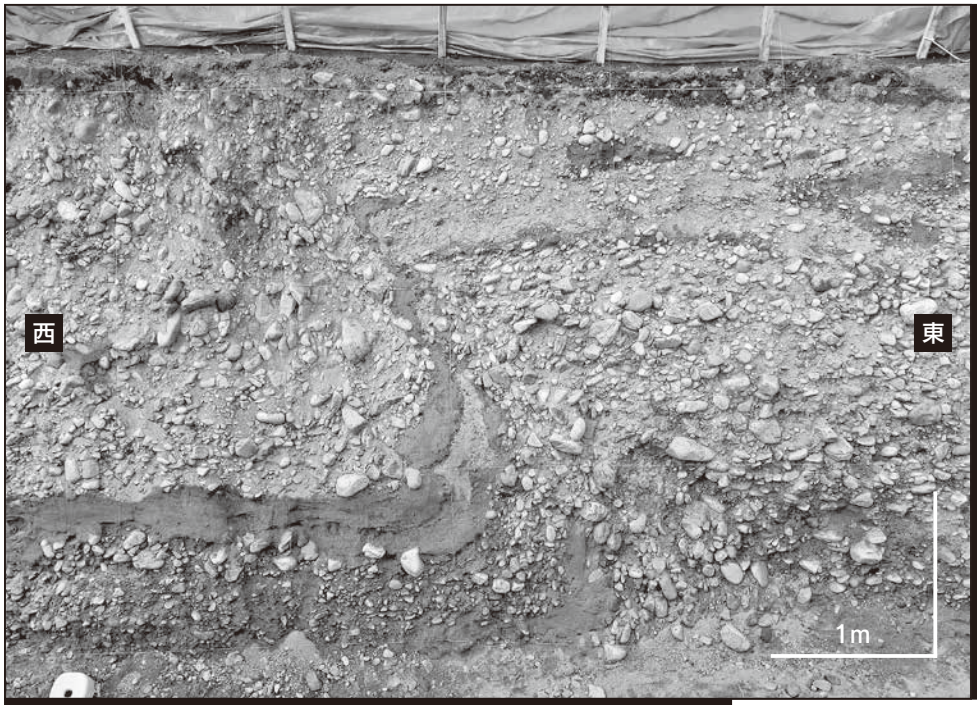
「山と博物館」は、大町市役所および市内社会教育施設で、設置・配布しているほか、博物館公式 Web サイトからもご覧いただけます。

1月号
第 59 巻 第 12 号
2014年

無料
Free

もくじ

今月の１枚 …… 1ページ
・神城断層が動いた！
さんぱく研究最前線 ―北アルプスの自然と人 トピックス― 2・3ページ
・大町市内の山城
博物館のひろば …… 4ページ
・平地区子ども育成協議会が見学　・山岳博物館協議会を開催
・第１０回安曇野アートライン展
イベントのご案内 …… 4ページ
・安曇野アートラインシンポジウム　・ライチョウ講演会
・大人のための観察会－冬のライチョウを見に行こう！－



トレンチ発掘で出現した大町市平借馬の神城断層

神城断層が動いた！

小坂　共栄

平成26年11月22日の午後10時8分ごろ、長野県北部の白馬村高戸山付近を震源とするマグニチュード6.7の長野県神城（かみしろ）断層地震（長野県北部の地震）が発生し、白馬村・小谷（おたり）村から長野市に至るまでの広い範囲に最大震度6弱の揺れで大きな被害を与えました。被災された方々には心からお見舞い申し上げます。

神城断層は、小谷村から白馬村を経由して大町まで連続する活断層ですが、その南方は松本盆地東縁断層へと連続し総延長は60kmを越える大きな活断層です。これまでの調査から、東側の地塊が西側に向かって押しあがるような運動を繰り返してきた断層とされていますが、今回も神城断層が同じような動きをしたとされています。震源分布や地表の地質状況を見ると、今回の地震を単純に神城断層だけを犯人とするわけにはいかないかもしれません。詳しい検討が必要でしょう。

独立行政法人産業技術総合研究所が、この地震に先だつ11月初旬～中旬にかけて大町市借馬（かるま）で神城断層に関するトレンチ発掘を実施したところ、見事な断層露頭が表れました（写真）。白馬村・大町、池田町で確かめられていた神城断層の特徴とよく似たものでした。

この断層は、糸魚川―静岡構造線沿いの活断層の一つですが、これまで頻繁に活動を繰り返してきたとみられます。この構造線に関係した他の活断層も含め、その動きは要注意です。今後も油断することなく地震への備えを強める必要があるでしょう。

（大町山岳博物館専門員）

北アルプス －フィールドガイド－

大町市内の山城

飯田　吉隆

大町市内の山城跡

地区	山城	居館
社	4	3
常盤	3	5
平	4	0
大町	0	6
八坂	23	2
美麻	28	6
合計	62	22

この表のように大町市内には84か所の山城と居館の跡があり、大北全体では146か所にのぼります。

たくさんある市内の山城や居館の跡ですが、記録に残るものはごくわずかで、一番多くの城がのっている「信府統記（享保九年・1724）」でも25か所にすぎません。しかもその中には「仁科氏の家来が住んでいたという言い伝えがあるのみ」という記事も多く、城の名前さえない城もあります。

さて、今「山城」と呼ばれているものは、長野県においては南北朝期から安土桃山時代にかけて存在したもので、その最大の目的は敵からの攻撃を防ぐことにありました。

山という地形をできるだけ利用し、さらに「曲輪」「堀切」「土塁」などの攻撃を防ぐ施設がつくられました。

山城の跡でもっとも目につくのが曲輪とされる平らな場所で、堀切や土塁は長い年月の間に平らになってしまったものか、それほど多く見ることはありません。

また、城跡に登ってみると、神をまつる祠や社が多いことに気づきます。このことから山城は地域の人々にとっては象徴的な特別な存在であったため、その跡は大切な場所として神をまつったとも言われています。

山城の実際（八坂地区）

＜鳥立城＞　塩沢川と北の沢にはさまれた尾根上、連続する三つの峰の東端の峰にあり、城域には大小の平場が十か所ほど見られます。堀切状の窪地や頂部の集落側の断崖沿いには土塁状の土盛なども残り、土盛の北端には石祠が建っています。三つの峰のある山塊全体が一つの城と考えられ、西方の二つの峰にも神社跡など、複数の平場があります。

鳥立城遠望（右端の峰）：切久保より

城域には「城の平」という地字名が24筆あり、この地が城と関係していることをうかがわせますが、その場所の多くは急斜面となっています。実はこれは「たいら」ではなく地元では「じょうのひら」と言うそうです。「ひら」は傾斜地や崖を指す地名によく用いられており、地名は文字だけでは判断できないという一つの例になると思います。

＜城が峰城（雷電城）＞　特徴は何より眺望にすぐれていることで、特に金熊谷をはさんだ西方からはとても目立つ山容です。頂部には水神である「雷電」がまつられ、その周囲には数か所の平場と、「天水溜」とされる窪地が二か所あります。

城が峰城遠望（中央高い峰）：八坂小より

雷電社の石の祠には明和五年（1768）の年代が刻まれ、古くから信仰を集めていたことがわかります。

日照りの際には周辺の集落の人々が蓑笠を着けて雨乞を盛大に行ったそうです。

頂部平場と雷電社祠

また、大正時代には公園化計画が進められ、当時の申請書には「神社ヲ中心トシ郷党ノ親睦ヲ謀リ」という一文が見られます。

＜医王谷飯綱城＞　「医王谷」は曽山沢、塩沢川、金熊川沿いの十集落の総称で、その「医王谷総社」である旧飯綱神社の境内が城跡とされています。城域には社殿と神楽殿など、三か所の平場があり、西側の急斜面の縁には社殿を囲むように土塁状の土盛があります。

飯綱神社神楽殿平場

山城の遺構は境内として整地された際に、失われたものと考えられています。この飯綱神社は古くから「筒粥神事」が伝わって来ました。集落の移転にともない神社も新しい地に移りましたが、今もこの神事は大切に守られています。

神社のある南尾根の二か所の峰に「飯綱社」と「あずまや社」の祠が建てられています。あずまや社の石祠にはこれを建てた三集落の名と如意輪観音が刻まれ、社に仏を迎えるというおおらかな気持ちも伝わってきます。

＜大平小屋場城＞　鷹狩山から三原の台地を経て東方にのびる広い尾根先に位置し、その尾根を囲むようにいくつかの古集落が存在します。また。「小屋場」という地名からもこの地と山城との関わりをうかがうことができます。

土塁状の土盛と隠れ郭とされる平場

城域はおよそ東西150ｍ、南北400ｍという広大なもので、工場の敷地となっている部分を中心とした南部と、北に離れた北部の大きく二つに分かれています。

山岳博物館　市民「無料」開放デー

博物館では、毎月第3日曜日（家庭の日）とその前日の土曜日を「大町市民無料開放デー」としています。1月は17日（土）と18日（日）です。

平場の数も多く、およそ二十数か所もあり、「天水溜」とされる広い窪地や、60mほども続く高い土塁状の土盛、土盛の西側には「隠れ郭」とされる広い平場があります。

しかし、山城として見た場合、「郭や曲輪、土塁などの施設の配置が計画性に欠け雑然としている」という見方が一般的です。一志茂樹博士は著書の中で「巨大な未完成と覚しき山城」と述べています。

人々にとっての山城とは

山城のあった当時の人々は非日常的な出来事や、ふだん生活している場とは異なる場所を、別の世界とする考え方がとても強かったようです。山城は合戦の際に必要とされるもの。つまり、生命や財産がおびやかされるこのような状況は、もっとも非日常的な出来事だったのです。

したがって、山城は身近にあっても日常的には人々の意識からは遠い存在でした。有事の際に戦いに備えて曲輪や堀や土塁が整備され、小屋が建てられ、食料や水が上げられ、何より人が配されてはじめて「山城」になったのです。

そして、戦いが終わり有事が去ると、城は不穏なもの、不要なものとして小屋などの施設は取り壊されるか焼却されました。

このように、山城は残すような特別な存在ではなく、有事が去って日常的な生活が続くようになると城の存在は忘れられ、やがて「仁科氏の家来が住んでいたという言い伝えがあるのみ」という伝承の世界へと姿を変えていったのです。

また、山城があるような高い峰は古くから信仰の対象でした。尾根筋や峰にある祠はそのような信仰の一つのあらわれであり、城跡の祠も山城とは直接関係のないものと考えても良いと思います。このような場所は城が峰のように本来は人々が祭祀や催事を通して連帯を深める大切な公共の場所でもあったのです。山城の存在、それは人々の営みという、永い歴史の流れの中にあっては、ほんの一時の出来事だったといえるのではないでしょうか。

ブランコや堂のある城跡の平場（辺尾城）

以上のようなことからも、山城を現在の考え方によって判断することには注意が必要です。たとえば、山城跡とされる場所にある平場はすべてが曲輪であり、土盛は土塁なのか。窪地は天水溜なのか。なぜ鳥立や飯綱の城のように、ふつうは土塁を必要としない崖や急斜面の側に土塁があるのか、等々。

事実、曲輪とされる平場の中には後世の耕地である場所も少なくありません。小屋場城の天水溜も公図には「溜池」とあり、その下の曲輪は「水田」になっています。もちろん、これらが山城の施設を利用してつくられたことも考えられますが、配慮しておきたい事実です。

また、市内にある80あまりの城館はすべて同じ時期に機能していたのか、また、この地に城を構えるような「有事」が実際にあったのかということも問題です。

文献資料としては、仁科氏が武田氏に臣従していた天文二十年（1551）、村上義清に丹生子城（大町市社）が攻められた記録が、今の所唯一確認されてはいるのですが。

山城の現状と今後について

大部分の山城は本来の自然の姿に戻りつつあるというのが現状です。保存会などの組織によって整備されている城もありますが、入り口も消え、道や遺構もわからない山城も多くなっています。

灌木におおわれた城への道

一方で山城に対する関心が高まり、他県の方から市内の山で新しい山城を発見したという連絡や、道の問合わせ、案内板設置を希望する声なども届きます。

また、城主と家臣、～曲輪、～式縄張、～流の馬出、烽火台などのように、その地域においてまだ明らかになっていない事柄が言葉として先行してしまっているという現状もあります。実は山城は、発掘調査も少ないこともあり、まだわからないことの方が多いという実状なのです。

しかし、山城が自然に戻っていくスピードは速く、やがて伝承として残るのみという可能性もあります。それも自然な歴史の流れであるという考え方もある一方で、何らかの形で後世に伝えていかなくてはならないという考えも少なくありません。いずれにしろ、自然に戻りつつある山城をどうしていったらよいのか。その対応を皆で考える時期に来ていると思います。

しかし、山城のみを守り伝えていけばよいのでしょうか。山城の近くには必ず集落があり、かつてこれらの集落を結んだ幾筋もの山中の道があります。その道沿いや峠、周辺の峰や尾根には多くの祠や石仏などが残されています。時代はそれぞれ違っても、これらは一体となって息づいていたもの。自然に戻ろうとしているのは山城だけではないという現状にも目を向けなければならないと思います。

道沿いの石仏

尾根筋の石祠

参考文献

「殿村遺跡発掘報告会資料」　松本市教育委員会

「信濃の山城」小穴芳実　郷土出版社

「山城探訪」　宮坂武男　長野日報社

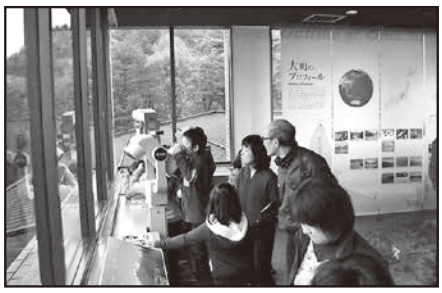
「八坂村誌　他各市町村誌（史）」　各編纂委員会　　他

（大町市文化財センター文化財指導員）

博物館のひろば

つぎの方は、年間を通じて博物館の観覧料が無料です。
・大町市内在住の 65 歳以上の方
・大町市内の小学校・中学校に通う児童・生徒の方
（入場の際、受付にてお名前等をご記入ください）

平地区子ども育成協議会が見学
平成26年11月1日（土）実施



平地区子ども育成協議会主催の「市内施設めぐり」に参加された児童12人、役員９人の皆さんが、高瀬ダムなど市内の３つのダムや発電所、大町エネルギー博物館を見学後、当館を訪れました。

参加した子どもたちは「さっき見てきた大町ダムがあそこに見える !!」と嬉しそうに歓声をあげていました。

３階展望ラウンジにある「大町のプロフィール」の写真や床に貼られた大きな地図を見ながらダムや博物館の位置を確認したり役割を学んだりしました。故郷を知る大切な一日になりました。

山岳博物館協議会を開催
平成26年11月11日（火）実施

本年度、第２回の山岳博物館協議会が、長野県山岳総合センターを会場に、協議会委員６人、事務局８人により開催されました。冒頭、宮崎亮委員（大町市観光協会）のご逝去の報告に引き続き、故人のこれまでのご尽力に対し黙祷を捧げ哀悼の意を表しました。

今回の協議事項としては、「鹿島槍ヶ岳カクネ里雪渓（氷河）総合学術調査」についてと「付属園でのライチョウの飼育」に関し協議が持たれ、委員の皆さんに多方面からのご意見、ご提案をいただきました。

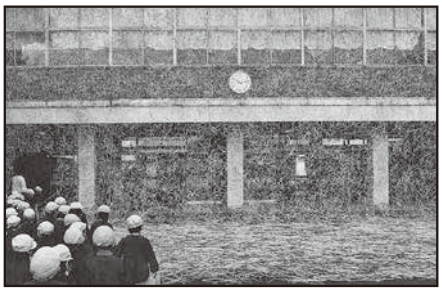
第 10 回安曇野アートライン展
平成26年11月22日（土）～12月23（火）日実施

国営アルプスあづみの公園（堀金・穂高地区）あづみの学校多目的ホールを会場に、今年も安曇野アートライン加盟館（19施設）の作品展を行いました。

期間中は国営公園内の35万個のイルミネーションが輝くなかで、各館からは油彩、水彩、デッサン、彫刻、写真など個性ある作品が一堂に集まり、来場された皆さんは、お気に入りの作品を見つけていました。山岳博物館からは、山川勇一郎氏の『西穂の小屋』や『山小屋の壁・ アイゼン』などの５作品を展示し、ご覧いただきました。

イベントのご案内

安曇野アートラインシンポジウム
平成27年1月10日（土）開催



学校をアートの拠点と位置づけ、アーチストや地域住民とともに児童生徒が個性溢れる作品を展示。

今回はその記録映画の上映と企画者・高松智行氏の講演会を実施します。

主　催	安曇野アートライン協議会
期　日	平成27年1月10日（土） 午後1時～3時30分
会　場	サン・アルプス大町　大会議室 （大町市文化会館隣り）
講演演題	「鎌倉なんとかナーレ」が残したもの
講　師	高松智行氏（前 鎌倉小学校教諭）
参 加 費	無料　（どなたでも参加可）

ライチョウ講演会
平成27年2月22日（日）開催

冬のライチョウの生活は謎が多く、近年、そのいくつかが解き明かされてきました。最新の研究成果をもとに冬のライチョウの生態を解説します。

主　催	大町山岳博物館・博物館友の会
期　日	平成27年２月22日（日） 午後１時30分～３時
講演会	「冬のライチョウはどんな生活をしているの？」
講　師	肴倉孝明氏（山岳環境研究所所長）
会　場	山岳博物館　講堂
定　員	50名
対　象	小学生～大人（どなたでも）
参加費	無料
申込み	不要

大人のための観察会
－冬のライチョウを見に行こう！－
平成27年3月8日（日）開催

夏の間は北アルプスの頂きや山稜で生活しているライチョウは、冬になると群れをなして亜高山帯で生活するようになります。冬のライチョウがどのような生活をしているのか現地を訪れ観察します。

主　催	大町山岳博物館・博物館友の会
期　日	平成27年３月８日（日） 午前８時～午後５時
集　合	ゴンドラ「イヴ」栂池高原駅前
会　場	栂池高原駅～栂の森（周辺散策） ～栂池高原駅
講　師	肴倉孝明氏（山岳環境研究所所長）
定　員	20名
対　象	全行程（雪の中）を歩くことのできる大学生以上の大人で、２月22日（日）に開催する講演会に参加できる方
参加費	4,500円（ゴンドラ代・保険料等を含む）
申　込 問合先	市立大町山岳博物館 （電話 :0261－22－0211）
申　込 期　間	平成27年１月６日（火） ～２月20日（金）

編集・発行
市立大町山岳博物館 OMACHI ALPINE MUSEUM
〒398-0002　長野県大町市大町 8056-1
市立大町山岳博物館　編集責任者　宮野典夫
TEL. 0261-22-0211 Fax.0261-21-2133
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.omachi-sanpaku.com

1月号
第59巻第12号

発行日　2014年12月25日
印　刷　株式会社 奥村印刷所
〒398-0002 長野県大町市大町2470
TEL.0261-22-0205 FAX.0261-22-1345